

石徹白と白山信仰

石徹白

石徹白地区は、郡上市白鳥町に位置し、白山連峰に源を発した石徹白川に沿った集落です。人口は316人(平成17年度国勢調査)、地区内は、上在所、西在所、中在所、下在所の4地域にわかれ、いずれも標高約700メートル以上の高地にあります。

石徹白という地名の由来は、「いしどうしろ」から転じて「いとしろ」となったとする説など、諸説あります。

地区内の寺社は、白山中居神社、安養寺道場、白鳥山威徳寺、雷鳥山円周寺です。

地区内の文化財は、国指定特別天然記念物「石徹白の大スギ」、国指定重要文化財「銅像虚空像菩薩坐像」、県指定重要文化財「白山中居神社の彫刻」県指定天然記念物「浄安スギ」のほか、県指定文化財7件、市指定文化財8件があります。

石徹白地区の歴史

石徹白地区からは、縄文式土器や石器類が発掘されており、古くから人びとが生活していたものと推測されます。

養老元年(717)に僧・泰澄が白山をひらいた際に、石徹白地区の白山中居神社の社域を拡張し、社殿を修復したと伝えられます。

石徹白地区は、全域が、この白山中居神社の神領でした。人びとは、社家・社人と呼ばれ、それぞれに白山中居神社と関わりあいながら暮らしました。神領ということから、無税(税金が免除)で、名字を名乗ること、帯刀を指すことが許されていました。

また、無主無従で、いわゆる大名領になったことはほとんどありません。石徹白地区の主要な出来事は、オトナ(頭社人)と呼ばれる12人の人びとの合議によって決められました。

このような石徹白地区で、江戸時代中期の宝暦年間には、真宗道場威徳寺の昇格を発端とし、白山中居神社の神職間の対立関係が原因の「石徹白騒動」が、明治初年には新政府の神仏分離令に端を発する神仏分離騒動が、そして昭和30年代初期には越県合併問題という、石徹白地区内を2分するような騒動が3度起きています。

社家・社人

石徹白地区の中でも、白山中居神社がある上在所の人は社家とよばれ、そのほかの在所の人びとは社人といわれました。また、小谷堂・三箇集落の人びとは、末社人と呼ばれました。

社家は、神に仕えることを本職とし、神頭、神主、幣司、神楽司等として、白山中居神社の神事・祭礼をつかさどりました。

社人は、平常は百姓をしていながら、白山中居神社の祭事のときに奉仕した人びとのことで、同社の維持管理を担いました。

社家・社人たちの暮らしと白山信仰

「木山三里、笹山三里、はげ山三里」といわれた白山への長い禅定道では、登拝者たちに先達(案内人)は欠かせないものでした。行者(修験者・山伏等)以外の登拝者たちは、石徹白地区で1泊した後、銚子ヶ峰、別山を経て白山をめざしたとされます。

こうした登拝者たちの宿坊を営み、祈祷をし、登拝者たちの案内人をしたのが御師と呼ばれる人びとです。冬場は、白山神の羽織袴に帯刀を指し、雷除けの護符に牛王札、白山の薬草、白山略図を持って、各地の檀那場を回り、白山信仰を広めました。檀那場を一回りすると金50両・米50俵などの寄進があったともいわれます。

御師は、上在所の社家になりました。社家は、神に仕えることを本職としたので、御師としての収入が、生活の支えでした。

一方で、平常は百姓として田畑を耕作していた社人たちは、石徹白地区が白山中居神社の神領として無税であったことから、収穫物は全て自分のものとなりました。

社家は、御師として、社人は、神領ゆえ無税という恩恵を受けながら、白山信仰の中で生活をしていました。
